日本におけるトルコ関係文献の推移(3)

――オスマン帝国／トルコ共和国に関わる旅行記・紀行文の研究――

三　沢　伸　生

はじめに

歴史学をはじめとして外国研究を行う人文社会系学問にとり，旅行記・紀行文は極めて重要な史資料であることは，日本に限らず世界で共通に認識されているところである。

しかしながら日本において日本人の著した旅行記・紀行文は一部の著名なものを除いて，必ずしも網羅的に精査・研究が充分に行われているとは言い難い。古くは文学研究の枠内で（瀬沼1962）のような試みがなされたものの，刊行当時のデータベース未成熟の時代において一人の研究者で全てを担うには限界があり，刊行当時の評価は高かったものの，結局は第１巻：アメリカ編のみで頓挫してしまった。時代を経て，最近ではIT技術の著しい進展にともなって，様々な出版物や非出版物の文書類についても諸データベースの構築・公開が普及し，さらにはツーリズム研究の学術的価値が広く認知されて，従前まで文学研究の未開拓分野としての旅行記・紀行文への関心が高まり，優れた調査・研究の業績が陸続と現れてている[(1)]。

こうした研究環境の好転にもかかわらず，日本人の中東・イスラーム世界に関わる旅行記・紀行文の調査・研究は，欧米諸国・アジア諸国に関わる旅行記・紀行文の調査・研究に比べて遅れている。そこで本稿は，日本におけるトルコ関係文献についての調査・研究を進めるための第一歩として，対象地域をオスマン帝国・トルコ共和国に限定して，日本人の旅行記・紀行文の調査・整理・研究を試みるものである。

２．文献の史料的性格

本稿でとりあげる旅行記・紀行文は，一時的な旅行・訪問にとどまらず，公務や仕事の関係などで一定期間のあいだの滞在・居住したものも含む。宿泊施設に泊まる一過性の旅行と，自分で居を構えて居住することには当事者の意識の違いが存在するであろうが，本稿ではその違いを問わない。また旅行記・紀行文は閲覧が限定される公刊とは言い難い報告書の類を原則的に除き，広く一般に公刊された単行本（ただし私家本も含む）と，雑誌などの逐次刊行物に掲載された記事に限定する[(2)]。確かに新聞においても同様な旅行記・紀行文が存在し，たとえばエルトゥールル号事件の生存者送還を契機にイスタンブルに初めて居住した日本人となった野田正太郎（1868-1904）は，『時事新報』記者として約２年間のイスタンブル滞在中に不定期に数多くの滞在記を同紙に掲載したことで知られており，新聞に掲載される記事が極めて重要であることは間違いない。しかしその一方で新聞は雑誌などの逐次刊行物と比べて一過性の傾向が強く，新聞社自身さらには図書館における保管も必ずしも充分でなく，後世への影響力という点では劣るという側面も同時に有する。近年，大手新聞社による創刊以来の新聞につきデータベース構築・キーワード検索の精度向上ははかられており，将来的には同様の調査が必要であることは充分に認識しているところである。

さらに対象地域として，オスマン帝国とトルコ共和国とをあげているが，後述するように，

幕末・明治期において多くの日本人がヨーロッパ諸国へ渡航するための経由地としたエジプトだけの場合は本稿では取り扱わない。飛行機がなく船が主たる移動手段の時代，多くの日本人は，1869年のスエズ運河開通後，また運河完成前でもスエズ＝アレキサンドリアを経て，地中海，そしてヨーロッパ諸国を訪れるのが通例であった。また19世紀おわりにシベリア鉄道が開通すると，ウラジオストクを始発に，ヨーロッパ諸国への本線を逸れてオスマン帝国・トルコ共和国を訪れる者も出始めた(3)。

また旅行記・紀行文の定義もやや曖昧にならざるを得ない。創作は別として，旅行記・紀行文は現地情報に乏しく，本人の行動記録になるものもあれば，筆の趣くままに現地を描写して自分の感情を書き連ねるものもある。記載内容は事実とは限らず，噂や伝聞に終始しているものも散見する。また公務･社命出張の報告書は，関連事項にのみ特化している場合がほとんどであるが，中にはその出張の事実自体が大きな意味を有することがあるので無視できないので全ては排除していない。

本稿において便宜上，以下のように時期区分を設定しながら整理･分析していく。すなわち，A.幕末期の文献を対象外ながら前史として概略し，B.明治期（1868～1912年），C.大正期（1912年～1925），D.昭和：戦前・戦中期，E：昭和：戦後期の５つの時期区分である。平成・令和期のものは対象外とする。第一に量が膨大になったこと，第二にIT技術の進展にともない，もはや旅行記・紀行文が従前までの書籍・逐次刊行物の形態をとらずに，インターネット上にSNSやインスタグラムとして，画像･動画を伴って公開されることが増大になったためである。決して現況を否定するものではなく。平成期以降現在に至るまでの時期においては，史資料確定に貢献する文献研究のあり方も再考されなくてはならなくなってきている。しかし本稿では手に余る案件であり，前述のように第一歩として旧来の紙媒体の文献研究に特化する。

３．各時代文献の特徴

A. 前史：幕末期

幕末期において，江戸幕府や諸藩に者たちが紅海を経て，スエズに至り，運河完成前ゆえに陸路エジプト入りして地中海に入り，ヨーロッパ諸国へ渡り，その際に旅行記・滞在記を残している事例が複数存在する。

幕府側では1862（文久１）年，1864（文久３）年に派遣した遣欧使節団が有名である。前者には福沢諭吉が通訳として参加し，エジプトでの体験談を書き残しており，後者ではスフィンクス前で撮影された集合写真が知られる(4)。一方，幕府に内密のままにヨーロッパ諸国に渡った事例として，後述する薩摩藩士の中井弘（1839-94）が1866年にスエズ・アレキサンドリア経由で地中海に入りヨーロッパ諸国を訪れた。その略行程を『西洋記行 ： 目見耳聞録』（のちに『西洋紀行：公開新説』と改題，堺屋仁兵衛，1870年刊）として著した。

こうした事例は，エジプトを介しての日本人の中東・イスラーム世界に関わる旅行記・紀行文として極めて重要であるが，前述のようにオスマン帝国を意識したものではないので本稿の対象からは除外する。幕末期においていくつかの出版物を通してオスマン帝国の存在を認識していた日本人は存在すが，実際にイスタンブルなどオスマン帝国本体に赴き，旅行記・紀行文を著した日本人は，管見の限り皆無である。

B. 明治期

周知のように明治維新直後においては，今日と違って外国に出ることは容易ではなく，極少数の政治家･軍人･官僚などに限定されていた。やがて明治中期になると商用などで民間人も徐々に外国に出かけるようになりだした。この状況はオスマン帝国に関しても同様で，明治初期は，前述の中井弘が外交官として赴いたイギリスから帰路に，渡辺浩基（1848-1901）とともにイスタンブルを訪問したことを記した『漫

遊記程』を草分けとして，同じく維新政府の要人である黒田清隆（1840-1900），谷干城（1837-1911），皇族の小松宮彰仁親王（1846-1903），1890年のエルトゥールル号事件に際して生存者送還事業に従事した比叡・金剛関係者の記録が続く。

軍人たちも頻繁にイスタンブルを訪問しだすものの，その職務の守秘性ゆえであろうが訪問の記録を公刊することは稀である。軍人として初めてオスマン帝国を訪問した井上良馨（1845-1929）にしても公文書の報告を除けば，新聞の求めに応じた短い逸話の再録しかなく，著名な福島安正（1852-1919）や寺内正毅（1852-1919）も公刊された紀行文を著していない[5]。

民間人のあいだでは，知己の幸田露伴（1867-1947）をして「書生商人」と言わしめた貿易業として長くイスタンブルに居住した山田寅次郎（1866-1957），メディア界の大物である徳富蘇峰（1863-1957）や朝比奈知泉（1862-1939），後に建築学の泰斗となる伊東忠太（1867-1954）の存在が際立っている[6]。

C. 大正期

はやくからオスマン帝国の戦略的重要性に注目していた日本陸軍は，両国間に外交関係がないにもかかわらず，駐在武官と同等の働きをさせるべくイスタンブルに在外武官を置いた。1907年にイスタンブルに送り込まれた森岡守成（1869-1945）は，名目上はドイツ大使館の駐在武官であり，その実1909年までイスタンブルへの長期出張形態で滞在した。森岡が著した『土耳其事情』はオスマン帝国に長期滞在した日本人による公的調査出版物の嚆矢である。市販物ではなく閲覧は限定されていたであろうが，当時の日本がオスマン帝国をどのように認識していたのかを知るうえで第一級の記録である。森岡の後任に佐藤小次郎（1872-1928），村岡長太郎（1871-1930）が1913年までイスタンブルに滞在し，以後途絶える。佐藤・村岡の筆になる公刊出版物は管見の限り見いだせない。同様に在ポートサイド領事館の領事代理を務めた小林哲之助（生没年不詳）の著作も貴重である。後の笠間杲雄などにもみられる特徴であるが，公文書にしばしば登場する外交官たちが，自らの著作を著すときに，いかに文章・叙述内容が変わってくるのかをよく示す事例である。

第一次世界大戦期はオスマン帝国と日本は交戦こそなかったものの敵国同士となったため，オスマン帝国における滞在，訪問は途絶えた。前述の山田寅次郎が築き上げた中村商店は，日露戦争終結後の1904年に山田が帰国した後は中村栄一（生没年不詳）により営業されていたが，開戦が近づくと1914年に閉店・撤退を余儀なくされた。中村栄一本人による著述は見いだせないが，息子の中村新七の評伝により，この間の事情を知ることが出来る。山田の著名度の陰に隠れて忘却されていた中村栄一であるが，山田のイスタンブル居住が評伝に書かれているような1914年までででなく1904年であり，その後は中村栄一が中村商店を切り盛りしていたので，同書を同時期の森岡などその他の旅行記・紀行文と照らし合わせる興味深い事実が出てくる。

第一次世界大戦に際してマルタ島を拠点に活躍した第二特務艦隊に所属する艦艇の一部は，日本への帰還途上にイスタンブルを訪問した。以後，戦勝国として，イスタンブルには陸軍・海軍の軍人，外交官たちが滞在するが，公文書以外に滞在の記録を公刊してはいない。対照的に，久留義郷など日本のマスコミ関係者たちが戦後の世界情勢を取材すべく，イスタンブルを訪問し始める。軍人と対照的に彼らは非常に能弁に戦後の状況を書き残している。

D. 昭和：戦前・戦中期

1923年にトルコ共和国が建国され，翌1924年にローザンヌ条約により日本との外交関係が樹立されると，1925年にイスタンブルの公使館が大使館に格上げされた。こうして昭和の時代には，今まで以上に多くの日本人がトルコを訪問・在留することとなった。

この時期にトルコに居住を始めたのは，まずは海峡管理委員，公使館（のち大使館）の開設に伴う外交官たちと，公館開設に伴う陸軍・海軍の駐在武官たちである[(7)]。駐在武官たちの著述は圧倒的に非公刊の公文書・私文書であり，公刊物は少ない。例えば，陸軍の駐在武官であった神田正種（1890-1983）中佐は，トルコ共和国において行き場を失ったアブデュルレシト・イブラヒム（1857-1944）を日本に招聘するために活動した人物であるが，トルコでの活動に言及する公刊出版物は小文１点にすぎない。

軍関係では，1926，1934，1937年の練習航海のために海軍の練習艦が地中海諸国訪問途上にイスタンブルに寄港し，数百人規模の乗組員が訪問を果たした。その際に記念写真帖や覚え書など数々のものが製作され，なかには回顧録として公刊されたものも存在する。海軍の文書は淡々と事実を記すのみであるが，こうした回顧録には感想が交えられていて興味深い。なかでも1926年の練習艦隊司令官の山本英輔（1876-1962）中将らはイスタンブルから列車でアンカラに赴いてアタテュルク大統領への謁見の栄誉に浴した。また1931年に海軍将校でもある高松宮宣仁（1905－1987）親王・妃殿下が欧米諸国周遊途上にトルコを訪問した。

それより少し遅れて，商工省が開設し，運営を大阪商業会議所（さらにその内部に組織された日土貿易協会，のち近東貿易協会）に委託した，日本商品館関係者たちである。しかしながら日本商品館の初代館長として招聘された安江安吉（生没年不詳）は，前述した商品館機関誌『コンスタンチノープル日本商品館館報（のちイスタンブル日本商品館館報）』に掲載された記事以外に，本人のイスタンブル滞在にかかわる滞在記が見当たらない。

こうしてイスタンブルに外交・軍事・商業の拠点ができたことにより，明治・大正期と比べて日本人来訪者の数は飛躍的に増大した。しかしながら1929年のニューヨーク株式市場の大暴落に端を発する世界恐慌によって事態は一変することとなった。恐慌の波はやがて新生トルコ共和国をも巻き込み，アタテュルク大統領は自国産業保護のためにバーター貿易を宣言し，これにより日本の対トルコ貿易は著しく後退し，1936年に日本商品館も閉館に追い込まれた。

戦中期，トルコは長らく中立を維持していたものの，やがて大使館員たちは大使館に軟禁状態におかれ，小林高四郎（1905-1987）の『イスタンブールの夜』は，その間の事情をよく伝える。また読売新聞パリ支局長であった松尾邦之助（1899-1975）がパリ占領にともないベルリンに移ったあと1942年にイスタンブルに派遣され，単行本『とるこ物語』ほかいくつかの滞在記録を残している。

終戦直前に戦後世界政策に参画するためにトルコは日本への宣戦布告を行ったものの，両国は交戦することなく戦争は終結した。

E. 昭和：戦後期

戦後に事態は大きく変貌した。

すでに戦前期に地中海世界からの撤退を余儀なくされていたものの，戦後に「回教政策」が放棄されると，日本はトルコとの関係を一新させる。

政府は経済界と一体となって，トルコとの経済協力・通商振興を進め，官僚・財界人，多くの実務スタッフがトルコを訪問し，数多くの報告書と紀行文が発表された。

さらに注目すべくはトルコの観光業の進展にともない数多くの日本人芸能人／旅行者がトルコを訪れ，旅行記・紀行文を著している。出版形態も単行本のほか様々な一般雑誌に美麗な写真と共に掲載されることが増加した。さらに筆者自身が留学経験中に目撃したことであるが，ノンフィクション作家の沢木耕太郎『深夜特急』（全３巻）はイスタンブルを終着点としており，バブル経済期の日本人バックパッカー／個人世界旅行ブームと相俟って，多くの日本人若者をトルコ旅行に焚きつけていた。。

おわりに

歴史学にとって，公的・私的文書類ばかりでなく，公的出版物も重要な史資料となる。本誌でいくつかの主題につきトルコ関係文献を整理しているのは自身の研究余滴のようなものであるが，個別に利用してきた文献を年代別に一覧すると，個別の文献が特徴を持つ流れを持っていることに気づかされる。

また先行の２点についても，すでに遺漏の指摘を受けているが，もとより個人の作業限界で完璧になることは難しいと承知のうえで，あり，将来的に，紙媒体ではなく，ネット上にデータベースとして常時改訂・更新可能な形態を構築することを計画しており，御指摘を受けた／受ける遺漏はその際に改めていきたい。

今ひとつお詫びしなくてはならないのは，本稿もまた現今のコロナ禍の影響を受けてしまったことである。本来ならば，日土協会を継承する日本・トルコ協会の機関誌『アナトリア・ニュース』に旅行記・紀行文が収録されているのであるが，同誌を所蔵する国立国会図書館などの図書館の利用制限にともない現物確認を行えず，本稿では対象外とせざるをえなかった。

＜注＞

⑴　例えば，（東洋文庫1980）およびその補遺のように，学界では日本人の旅行記・紀行文の重要性を早くから提唱され網羅的目録作成の試みがなされており，中東・イスラーム世界についても地域別・主題別に編むことが急務であろう

⑵　筆者は，これまでイスタンブルに設立された日本商品館の研究過程で，まず機関誌である館報を図書館・古書肆で探索・入手してデジタル復刻し（三沢2008），ついで収録物を目録化した（三沢 2014）。同誌には詳細な現地の産業・経済情報が含まれているが，商品館に勤務していた日本人の経験談などは皆無である。それゆえ本稿では再録していない。このことはイスタンブル（後にアンカラ）へ移転した日本大使館の大使・館員が外務省に送った公刊逐次刊行物に関してもほぼ同様である（三沢2017b）。しかし対照的に公務を離れた私的な出版物においては様々な感想や，体験談を記しており，そのため本稿では外交官たちの著作が多数含まれている。

⑶　最近，近代日本にとってのエルサレムの存在についての臼杵の最新研究（臼杵 2019）は，日本人の旅行記・紀行文を史料に浩瀚な研究を行っており，従前までの西洋化・通商・軍事・外交といった枠だけでなく，宗教観にもとづく地域表象・掌握も重要な要素であることを明らかにされた。

⑷　福沢諭吉のエジプト経験については，（保坂2017）に詳しい。またこの使節団に加わった福地源一郎は後述のようにパリ滞在中の岩倉使節団からイスタンブルに派遣，後に外務卿となった寺島宗則はオスマン帝国との外交関係樹立を模索した。両名の原初の海外経験がその後の人生・公務，さらには日本社会のオスマン帝国・トルコ共和国認識にいかなる影響を与えたのかどうか興味深い事例である。

⑸　福島が情報将校の中心的人物になること，寺内が首相になることを考え合わせると，２名のオスマン帝国における体験は興味深い。福島のイスタンブルにおける行動については，自身の『亜欧日記』に詳しい。同書については，（三沢2018）参照。中央アジアに関して精力的な著作を行っている金子民雄もこの日記の存在は認知しているようだが，（金子1973）では参照されておらず，重要であっても非公刊文献が，専門家にすら所蔵を見出すのが困難であるかを示すものである。

⑹　山田寅次郎（宗有）関係の文献については，初回に取り上げた（三沢2017a）。また近年，学界・出版界において伊東忠太の再評価が高まるなか，伊東のオスマン帝国を含む中東・イスラーム世界における旅行記・紀行文が注目されている。山田も伊東も公刊出版物以外に，数多くの公文書・私文書の存在が確認されているので，今後の研究の進展が期待される。

(7) イスタンブルにおける日本の駐在武官たちのなかで最も著名なのは橋本欣五郎（1890-1957）であろう。根拠が不明だが，アタテュルクに感化をうけて，帰国後に桜会を組織したと言われるが，その実，橋本がトルコ共和国について公に著したのは小文１点のみである。

＜参考文献＞

＊臼杵陽2019『日本人にとってエルサレムとは何か：聖地巡礼の近現代史』ミネルヴァ書房.
＊金子民雄1973『中央アジアに入った日本人』新人物往来社.
＊瀬沼茂樹1962『日本文学世界周遊紀行』角川書店.
＊東洋文庫近代中国研究委員会（編）1980『明治以降日本人の中国旅行記：解題』東洋文庫.
＊保坂修司2017「福澤諭吉の見たエジプト」『原子力文化』48-12, pp.14-15.
＊三沢伸生（編）2008『日土貿易協会『コンスタンチノープル日本商品館館報／イスタンブル日本商品館館報』（DVD版，Ver.1)』東洋大学アジア文化研究所.
＊三沢伸生（編）2014『イスタンブル日本商品館関係資料集』東京：三沢伸生（科研費成果報告書）.
＊三沢伸生2017a「日本におけるトルコ関係文献の推移(1)山田寅次郎(宗有)関係文献の研究」『東洋大学アジア文化研究所研究年報』51, pp.330-349.
＊三沢伸生（編）2017b『外務省刊行逐次刊行物所収トルコ関係記事（1920-1940年)』東京：三沢伸生（科研費成果報告書）.
＊三沢伸生2018「19世紀末のイスタンブルにおける日本軍の情報活動：福島安正『亜欧日記』の史料的価値」『東洋大学社会学部紀要』55-2, pp.33-47.

※本稿は，日本学術振興会・科研費基盤研究（B)「大日本回教協会旧蔵写真資料の国際共同研究：画像資料の実態解明とアーカイブ構築」（2019～2022年度，代表：三沢伸生）の成果の一部である。

（研究員／社会学部国際社会学科教授）

著者表記	表題	誌名／出版社	巻数	号数	刊行年	頁数
中井弘（櫻洲山人）	『漫遊記程』	中井弘（私家版）			1878	
黒田清隆	『環游日記』（全3巻）					
小松宮彰仁親王	『歐國軍事見聞録』	［参謀本部］			1888	
太田彌太郎 ； 熊谷晉	「軍艦比叡土耳其國航海紀事」	『海軍医事報告撮要』		18	1891	24-108
藤田甫 ； 岡部千之	「軍艦金剛土耳其國航海紀事」	『海軍医事報告撮要』		18	1891	109-152
大山鷹之助	『土耳其航海記事』	大山鷹之助（私家版）			1891	
古川宣誉	『波斯紀行』	参謀本部			1891	
藤戸永綱 ； 磯部謙次郎	『軍艦金剛土耳古国航海報告』	水路部			1891	
小椋元吉 ； 松村龍雄	『軍艦比叡土耳古国航海報告』	水路部			1892	
無署名	「金剛艦土耳古航海記事」	『東方協会報告』		10	1892	57-85
井上敏夫	「土耳其航海紀行」	『東京地學協會報告』		2	1892	
山田寅次郎	「土耳其埃及実況」	『新国民』		3	1893	13-25
山田寅次郎	「土耳古通信」	『太陽』	2	1	1896	29-31
望月小太郎	「土都述懐（三首之一）」	『太陽』	2	24	1896	17
田健治郎	『鵬程日誌』	田健治郎（私家版）			1898	
山田寅次郎	「土耳其事情」	『太陽』	5	21	1899	204-207
鎌田栄吉	『欧米漫遊雑記』	博文館			1899	
黒板勝美	『西遊二年欧米文明記』	博文館			1899	
徳富猪一郎	「土京の友人」	徳富猪一郎『社会と人物』民友社			1899	312-318
阪谷芳郎	「土人の日本人を甚だ慕ふ理由」	『実業少年』	3	2	1899	16-17
家永豊吉	『西亜細亜旅行記』	民友社			1900	
山田寅次郎	「東欧所見」(1)-(6)	『東洋』	1-2	10,11,01,02,04,05	1901	19-52,11-44,30-32,24-26,30-32,33-35
佐々木善次郎	「土耳古の煙草作に就て」(1)-(7)	『日本煙草雑誌』	6	1,4-9	1901	2-3,2-3,2-3,3,3,4,3
池辺義象	「土耳古の風俗」	『世界読本』弘文館			1902	175-194
池辺義象	『欧羅巴』	金港堂			1902	
川口清五郎	「土耳古の摺餌の事」ほか	川口清五郎『諸鳥飼養全書』文武堂			1903	150-155
末松青萍	「コンスタンチノープルより」	『こころの華』	10	2	1906	56
徳冨蘆花	『順礼紀行』	警醒社			1906	※全集にも再録
伊東忠太	「支那、印度、土耳其旅行談」（全10回）	『建築雑誌』		235,238,240,241,242,244,245,278,279	1906-1910	231-248,392-413,625-646,774-800,3-29,12-32,197-211,3-19,89-103,146-151

長谷場純孝	『欧米歴遊日誌』	民友社			1907	
長瀬鳳輔	「中央亞細亞及土耳古内地族行談」(1)-(2)	『慶應義塾學報』		130-1	1908	28-33, 37-42
坪谷水哉	「奇なる土耳其風俗 」	『東西南北』	3	1	1908	16
坪谷水哉	「君斯坦知堡」	『商工世界 太平洋』	7	12	1908	口絵＋55-58
坪谷水哉	「土耳其国都駐在記」	『冒険世界』	2	6	1909	42-48
朝比奈知泉	「土耳其雑感」	『太陽』	15	10	1909	182-186
飯島亀太郎	「土耳古の事情」	『太陽』	15	10	1909	186-189
坪谷善四郎（＝水哉）	『世界漫遊案内』	博文館			1909	
立作太郎	「土耳古の視察談」	『国際法外交雑誌』	8	7	1910	545-555
[坪谷水哉]	「土耳古みやげ 珍らしい風俗」	『少年世界』	16	2	1910	※写真１葉
坪谷水哉	「珍妙なる土耳古の國都」	『少年世界』	16	2	1910	70-76
森岡守成	『土耳其事情 ： 森岡中佐報告』	参謀本部			1910	
中村直吉 ； 押川春浪	『鐵脚縦横』	博文館			1910	
坪谷水哉	「奇国周遊 ボスポラス海峡往来」	『冒険世界』	4	11	1911	口絵＋80-86
坪谷善四郎（＝水哉）	『海外行脚』	博文館			1911	
山田寅次郎	『土耳古畫観』	博文館			1911	
山田寅次郎	「土耳古談」	『貿易』	12	9	1911	48-52
小塚正一郎	『欧米巡遊日記』	小塚正一郎（私家版）			1911	
井上雅二	『四大陸遊記』	民友社			1911	
井上雅二	「再遊の土耳古」(1)-(2)	『東洋時報』		152-3	1911	31-42, 38-47
小松武治	「土京の大會／黒海の邊りより／土耳古の第一日／君府を辭せんとして文學士」（通信）	『開拓者』	6	6	1911	43-50
小松武治	「予が觀たる土耳古」	『新日本』	1	6	1911	140-144
坪谷水哉	「土耳其から伊太利へ」	『太陽』	18	10	1912	428-434
星野行則	『見学餘録』	警醒社			1912	
谷干城 ； 島内登志衛（編）	『谷干城遺稿』上・下（全4巻）	靖献社			1912	
黒板勝美	「曾遊の土耳古を回想して老帝國の末路を愴む」	『海之世界』	7	1	1913	20-26
石井柏亭	『欧州美術逼路』上巻：埃及・土耳古・伊太利・仏蘭西の巻	東雲堂書店			1913	
重徳來助	『瀕死の土耳古』	政教社			1914	
蜷川新	『欧米我観』	清水書店			1914	
中目覚	『バルカン旅行談』	[三省堂]			1916	
中目覚	『バルカン旅行談附録』	三省堂			1917	
小林哲之助	『ガラタ塔より』	大鐙閣			1917	
小林哲之助	『土耳其の現勢と近東問題』（※上記の改題）	大鐙閣			1918	

坂口昴	「君府の思ひ出」(1)-(2)	『史林』	3	1,2	1918	97-108,299-306
松下	「地中海戦實記」	『寸鉄』	1	1	1918	100-116
無署名	「コンスタンチノープルの朝：日進の遠征」	『海軍』	14	4	1919	写真
無署名	「君士坦丁堡に於ける土耳其主力艦隊」	『海軍』	14	4	1919	写真
無署名	「君府に於ける奮宮殿と我水雷戰隊」	『海軍』	14	4	1919	写真
津野田是重	『戦後の欧米 ： 踏破十有七国』	博文館			1920	
久留義郷	『敗殘の國々を辿りて ： 獨墺及巴爾幹』	日本評論社出版部			1921	
山岡光太郎	『外遊秘話』	飛竜閣			1922	
伊東忠太	『余の漫画帖から』	実業之日本社			1922	
井上雅二	『改造途上の世界』	民友社			1923	
内田定槌	「（本協會招待會講演 ）土耳古滯在中の所感」	『国際知識』	3	11	1923	82-91
内田定槌	「土耳古の情報」	『文明大観』		2	1924	33-47
内田定槌	「新・土耳古国の建設」	『啓明会講演集』		16	1925	
中平亮	『欧・亜・弗の旅 ： 君府から聖都まで』	日本評論社			1925	
田鍋安之助	『西南亜細亜視察談』	黒龍会出版部			1926	
坂本一	「日土交驩の端」	『日土協会会報』	1	1	1926	5-11
笠間杲雄	「トルコの近状」	『波斯より土耳古まで』文明協會	99	152	1926	
笠間杲雄	「バルカン事情特に土耳古に就て」	『龍門雑誌』		455	1926	18-44
笠間杲雄	「革命後のトルコ」	『太陽』	32	5	1926	107-115
笠間杲雄	「土耳其及バルカン地方の現状」	『講演会速記録』（日露協会）	15		1926	1-35
後藤智	「土耳古の学校生活」	『大乗』	5	7	1926	95-97
上村辰巳	「エルサレムの聖地巡礼から君府迄」	『大乗』	5	7	1926	83-88
上村辰巳	「亜細亜トルコ巡礼記」(1)-(2)	『大乗』	5	10,11	1926	85-91,65-74
大谷光瑞	「地中海遊記」(1)-(5)	『女性』	9	6-10	1926	1-3,1-6,153-158,27-36,44-56
井上雅二	「新土耳古建設の前提：十七年前の土耳古」	『日土協会会報』		2	1927	54-75
牧野英一	『海をわたりて野をわたりて』	日本評論社			1927	
大石喜一	『新しき国古き国』	福音社			1927	
副島次郎	『アジアを跨ぐ』	大阪毎日新聞社			1927	
安住伊三郎	『欧亜両洲をおとづれて』	東洋貿易新報社			1927	
山本英輔	『世界英傑巡礼』	宝文館			1927	
花岡止郎	『列強の興廃を見つゝ』	集成社			1927	
芦田均	「アンゴラの都」	『中央公論』	42	11	1927	
芦田均	「熱血児ケマル・パシャ(世界英傑伝)」	『キング』	4	4	1928	
山本英輔	「ケマル・パシヤとの會見記：新興土耳古の快男兒」	『海外』	3	16	1928	74-82

井上良馨	「五十年前」	『戊辰物語』東京日日新聞社			1928	129-133
日高壮之丞	「トルコ使節潮岬の遭難」	『その頃を語る』			1928	70-75
伊藤謙三	「土耳古行」	『大乗』	7	1	1928	52-58
須山彰	「私の観たアンゴラの干地農法」	『大乗』	7	2	1928	75-82
塩尻彦一	「アンゴラの原仕事」	『大乗』	7	2	1928	83-84
大城栄	「羅馬から君府まで」	『大乗』	7	5	1928	61-68
上村辰巳	「トルコに於ける私等の農園生活片々」(1)-(2)	『大乗』	7	1,2	1928	42-51,63-74
上村辰巳	「亜細亜の西から東を指して」(1)-(6)	『大乗』	7	4-9	1928	57-64,51-56,53-58,51-63,51-62,55-60
上村辰巳	「トルコ共和祭の其の夜」(1)-(2)	『大乗』	7	10,11	1928	51-57,49-67
上村辰巳	「最近の土耳古」	『大阪商工会議所月報』		252	1928	1-8
山岡光太郎	『アジアの二大運動：回教徒とユダヤ人』	渡部事務所			1928	
山岡光太郎	『聖都から聖都へ』	植田印刷所			1928	
煙山専太郎	『再生の欧米を観る』	実業之日本社			1928	
稲畑勝太郎	『欧亜に使して』	日本評論社			1929	
安住伊三郎 ； 安住みや子	『私が感じたまゝ ： 附土耳古人生活状態』	安住修徳會			1929	
小幡酉吉	「最近の土耳其」	『東洋』	32	7	1929	
小幡酉吉	「土耳古より歸りて」	『外交時報』	50	6	1929	1-10
川島信太郎	「近東及中東事情」	『東洋』	32	6	1929	1-19
大谷光瑞	「鵬遊記」(1)-(4)	『大乗』	8	1-4	1929	47-63,49-63,37-43,33-49
芦田均	「最近の土耳古事情（講演速記）」	『大阪商工会議所月報』		274	1930	
芦田均	「土耳古の近状」	『日土協会会報』		11	1930	
芦田均	「亜細亜に気を吐く怪傑ケマル」	『雄弁』	21	7	1930	
芦田均	「土耳古の近状とシリヤ、パレスタイン」	『文明協会ニュース』		7	1930	1-40
芦田均	「土耳古の現状（講演）」	『龍門雑誌』		502-3	1930	
上村辰巳	「君府の秋」	『大乗』	9	12	1930	36-40
副島次郎	『アジアを跨ぐ』	大道社			1931	
占部百太郎	『聖地紀行』	大岡山書店			1931	
山田寅次郎	「土耳古商況視察談」	『コンスタンチノープル日本商品館館報』		10	1931	5-15
上村辰巳	「トルコ果して亜化か欧化か」(1)-(3)	『大乗』	10	1,3,4	1931	31-36,63-70,70-76
芦田均	「土耳其帽を葬る」	『東洋』	35	1	1932	178-181
上村辰巳	「君府の春を語る」	『大乗』	11	6	1932	49-62
坪谷水哉	「ボスフォラス海峡往来」	『水哉紀行選集』博文館			1933	382-398
市河三喜 ； 市河晴子	『欧米の隅々』	研究社			1933	

中川繁丑	『元帥島村速雄傳』	中川繁丑（私家版）			1933	
鎌田栄吉	『鎌田栄吉全集』第1巻	鎌田栄吉先生伝記及全集刊行会			1934	
坂本一	「土耳古軍艦エルトグロール生存者送還談」	『有終』	22	12	1935	99-109
武者小路公共	「土耳其在勤中の思ひ出」	『日土協会会報』		18	1935	1-9
笠間杲雄	『沙漠の国』	岩波書店			1935	
下田将美	『欧亜点描』	一元社			1935	
加藤泰通	『熱風をあびて』	尚文堂			1935	
徳冨蘇峰	『蘇峰自伝』	中央公論社			1935	
山田寅次郎	「帝政の土耳古と現代の土耳古」	『愛知商工』		198	1935	12-23
伊東忠太	『見学紀行』	龍吟社			1936	
大谷光瑞	『光瑞縦横談』	実業之日本社			1936	
山岡光太郎	『血と銭』	植田印刷所			1936	
森岡守成	『餘生余録』	日本国防協会			1937	
渡辺良助	『周遊六万粁』	開成館			1937	
比屋根安定	『世界巡礼記』	教文館			1937	
名古屋新販路輸出協会（編）	『近東埃及市場調査』	名古屋新販路輸出協会			1937	
朝比奈知泉	『老記者の思ひ出』	中央公論社			1938	
神田正種	「ケマル大統領の印象」	『大亜細亜主義』	6	12	1938	37-40
加藤清忠（編）	「土耳其視察」	『堀越善十郎傳』加藤清忠（私家版）			1938	101-108
清浦奎吾	『奎堂夜話』	今日の問題社			1939	
笠間杲雄	『回教徒』	岩波書店			1939	
村上義溫	「トルコの現勢」	『新亜細亜』		87	1939	50-60
上田貞次郎	『白雲去来』	中央公論社			1940	
武富敏彦	「『トルコの父』アタツルク」	『中央公論』	55	12	1940	214-8
梶野千萬騎	「トルコ王宮を震骸させた日本水兵(柔道實話)」	『野球界』		31	1941	147-51
橋本欣五郎	「トルコの憶ひ出」	『公論』	4	10	1941	257-264
笠間杲雄	『青刷飛脚』	六興商会出版部			1941	
内藤智秀	「近東風土記(トルコの巻)」	『旅』	18	8	1941	34-36
内藤智秀	『トルコ民族の風俗』	八木書店			1942	
内藤智秀	『東西文化の融合』	六盟館			1942	
井上雅二	『興亜一路』	刀江書院			1942	
天沼俊一	『坡西土から坡西土へ ： 昭和十六年』	天沼俊一（私家版）			1942	
徳永康元	「ブダペストよりかへる」	『時局雑誌』		1	1942	53-57
榎本桃太郎	「トルコ漫談」	『サンデー毎日』	22	37	1942	38-40

坂本一	「土耳古軍艦「エルトグロール」遭難者送還記」	廣瀬彦太（編）『大海軍發展秘史』弘道館圖書			1944	124-141
田中綱常	「比叡・金剛土耳古航海」	廣瀬彦太（編）『大海軍發展秘史』弘道館圖書			1944	142-153
廣瀬彦太	「金剛の土耳古航海紀事」	廣瀬彦太（編）『大海軍發展秘史』弘道館圖書			1944	154-173
松尾邦之助	『とるこ物語』	竹内書房			1947	
小田善一 著	『バルカンの表情：特派員ルポルタージュ』	文宣堂			1947	
小松三郎	『小松三郎 ： 歌集 古城篇』	青磁社			1947	
小林高四郎	『イスタンブールの夜：外交餘憤録』	一洋社			1948	
高田市太郎	『戦後の世界を飛ぶ』	日本交通公社			1948	
向後英一	『ヨーロッパ特派員の手記』	尾崎書房			1948	
栗原正	「イスタンブールの思い出」	『丸』	2	9	1949	
故阪谷子爵記念事業会（編）	『阪谷芳郎傳』	故阪谷子爵記念事業会			1951	
きだ・みのる	「イスタンブールの一夜」	『パリ・東京・モロッコ』要書房			1952	200-209
亀井高孝	「イスタンブールの今昔」	『世界史夜話』吉川弘文館			1952	179-202
遠藤左介	『七つの空を飛ぶ ： 百万円の通し切符』	岡倉書房新社			1952	
島野重信	「トルコ便り」	『大阪貿易館報』	1953	4	1953	14
島田巽	「安定に向かうトルコ」	『今日のヨーロッパ』朝日新聞社			1953	182-188
江上波夫	「トルコ」	『世界めぐり』毎日新聞社			1954	162-165
石黒敬七	『旦那放談』	朋文堂			1955	
石山慶治郎	「イスタンブールの月」	『灰色の国碧い海峡 ： アジア旅情』朝日新聞社			1955	211-220
久留勝	「イスタンブール、アテネ、ローマ 」	『漠のはらわた』日本臨牀社			1955	344-345
片岡豊	「トルコ覗き：欧米通信(其の七) 」	『Hotel review』		58	1955	13
中村進一	「トルコ通信」	『紡繊界』	46	5	1955	55-56
中村進一	「トルコ通信」	『紡繊界』	46	9	1955	56
平野和男 ； 大島哲男	「トルコだより」	『道路』		174	1955	400-1
大宅壮一	「戦争に強い国・トルコ 」	『世界の裏街道を行く』（中近東・欧州篇）文芸春秋新社			1955	68-76
倉田俊	「1955年イスタンブールにおける第4回世界教育者連盟代表者会議報告 」	『信濃教育』		826	1955	53-72
木村睦男	「（グラビヤ）イスタンブール」	『国際観光』		41	1955	1
内田亨	「イスタンブールの一夜」	『象牙の河馬』大日本雄弁会講談社			1956	116-128
萩原尊禮	「トルコ 2年間のスケッチ」	『科学朝日』	16	1	1956	86-91
倉田俊	「中近東紀行：トルコのイスタンブール」	『信濃教育』		830	1956	84-94
倉田俊	「中近東紀行：イスタンブールの会議」	『信濃教育』		831	1956	79-92
内田亨	「イスタンブールの一夜」	『学燈』	53	2	1956	42-47

内田亨	「イスタンブールの一夜」	『象牙の河馬 ： 随筆』大日本雄弁会講談社			1956	116-128
石黒敬七	『柔道世界武者修行記』	ベースボール・マガジン社			1956	
三上次男	「トルコ日記抄」	『地理』	2	2	1957	91-8
八田一朗	「レスリング・トルコ遠征夜話」	『週刊娯楽よみうり』	3	26	1957	47
土崎一	「イスタンブールの裏町にて」	『アサヒカメラ』	42	6	1957	38
沢田龍吉	「（外地だより）イスタンブール日記」(1)-(3)	『気象』		5-7	1957	22-24,23,22-24
辻豊 ； 土崎一	『ロンドン一東京5万キロ ： 国産車ドライブ記』	朝日新聞社			1957	
青木繁	『揺れる中近東 ： 特派員の見たアラブの世界』	毎日新聞社			1957	
辻政信	『世界の火薬庫をのぞく』	東都書房			1957	
村川堅太郎	「イスタンブールの四日間」	『地中海からの手紙』毎日新聞社			1958	45-52
筒井密義	「トルコ（イスタンブール） 」	『三十カ国の旅』西日本図書			1958	189-198
平井泰太郎	「トルコ土産：経営百話(3)」	『事務と経営』		102	1958	19
橋本圭三郎（口述） ； 長誠次（編）	『わが回顧録』	石油文化社			1958	
中村光夫	「トルコの話」	『聲』		4	1959	
高橋貞三	「トルコの印象」(1)-(2)	『同志社法学』	10,11	6,1	1959	51-57,63-71
下村寅太郎	「イスタンブールの印象」(1)-(2)	『心』	12	4,5	1959	59-69,20-31
無署名	「芸能トピックス　トルコへ行くペギー葉山」	『週刊東京』	5	8	1959	65-6
ペギー葉山	「トルコの旅とローマの休日」	『ミュージック・ライフ』	9	4	1959	54-5
中山正善	「トルコ　イスタンブール」	『北報南告』天理教道友社			1960	117-125
上村艶	「私のみたトルコの婦人と生活」	『女性教養』		256	1960	22-5
松尾邦之助	『巴里物語』	論争社			1960	
下村寅太郎	『ヨーロッパ遍歴 ： 聖堂・画廊・広場』	未来社			1961	
犬伏英之	「旅情 イスタンブール」	『朝日ジャーナル』	3	41	1961	42
新居五郎	「トルコの8日間」	『世界一周85日の旅』土木建築厚生会			1961	11-25
内野仙一郎	「イスタンブールというところ」(1)	『社会保険旬報』		663	1961	11+13
戸沢政方	「ISSA第14回総会に出席して：イスタンブール・タウン・ホールにて」	『週刊社会保障』		180	1961	28-34
吉垣淳	「コンスタンチノーブルの想い出」	『現代ポピュラー音楽全集』第2巻，現代芸術社			1962	70-82
小城吐夢	「（世界の旅）イスタンブール」	『週刊現代』	4	36	1962	60
山下孝介	「（ずいひつ）トルコの食べ物」	『栄養と料理』	28	3	1962	68
麻生武治 ； 森西栄一	『聖火の道ユーラシア』	二見書房			1962	
無署名	『躍進するアフリカ・中近東』	東京都新聞社			1962	
小田久栄門	『アラブの赤と黒：中近東で活躍する日本人』	秋田書店			1963	
表俊一郎	「紀行:トルコの旅」	『High Scholl English』	47	2	1963	33-8
阿部展也	「旅情 トルコ」	『朝日ジャーナル』	5	4	1963	50-4

塚本蝶子	「海外の看護 イスタンブール(トルコ)を訪ねて」	『看護学雑誌』	27	5	1963	85-9
護雅夫	「トルコ「皇后」に会った話」	『世界』		211	1963	208
鞆田幸俊	「イラン・トルコの思い出」	『郵便貯金』	13	8	1963	29-36
高橋昭一	「正調トルコ風呂 」	『経済と外交』		423	1963	51-2
嶋本昭三	「ギヨレメ：トルコ紀行」	『美術手帖』		229	1963	1-13
蜷川親博	『クルマ気ちがい世界を駆ける』	実業之日本社			1963	
三井所四郎	『トルコ国漁業技術指導報告書』	海外技術協力事業団			1963	
小名孝雄	『水兵と淑女 ： 日本海軍ヨーロッパ罷り通る』	国防協会			1964	
山本正司	「トルコ･ギリシャ電気通信使節団報告」(1)-(2)	『電気通信』		206-7	1964	10-17, 7-12
岡本光央	『欧米ひとり歩き』	新樹社			1964	
関口英男	「旅情 イスタンブール」	『朝日ジャーナル』	6	14	1964	54-58
嶋本昭三	「旅情 トルコ 」	『朝日ジャーナル』	7	7	1965	54-58
勝本清一郎	「イスタンブールの散歩（こころの遠近：7）」	『朝日ジャーナル』	7	17	1965	104-107
勝本清一郎	「イスタンブールの散歩」	『こころの遠近』朝日新聞社			1965	63-72
川崎偉志夫	「トルコ紀行」	『道路』		289	1965	216-8
関口英男	「東洋の幻想イスタンブール」	『インド・西アジア』（世界の旅:10）座右宝刊行会			1965	133-137
国際情報社（編）	『これが新しい世界だ』10	国際情報社			1965	
本城和彦	『建築家の休日 ： イラン・トルコ・ギリシャ家族旅行』	鹿島研究所出版会			1965	
徳岡孝夫	『太陽と砂漠の国々 ： ユーラシア大陸走破記』	毎日新聞社			1965	
高橋英彦	「旅情 トルコ」	『朝日ジャーナル』	7	26	1965	66-74
川崎偉志夫	「トルコ紀行」	『道路』		289	1965	216-218
中村国雄	「トルコ風呂の本場で」	『おふろ漫筆』三和図書			1965	187-189
茂木ふみか	『砂の国のアルカダシ』	主婦の友社			1965	
豊原路子	『出たとこ勝負 ： 私の世界マンユウ記』	東京文芸社			1965	
護雅夫	「トルコ」	『もっと知ってよい国』上，朝日新聞社			1966	126-134
井上英二	「トルコからのたより」	『地質ニュース』		147	1966	45-49
並河亮	「東の血と西の血･コンスタンチノープル周辺（世界の風土と造形：6）」	『みづゑ』		736	1966	29-46
村上喜一	『アフリカの旅』	新紀元社			1966	
大野忠男	『東方への回帰 ： 見て描いた文明批評 紀行』	春秋社			1966	
片山正夫	「アナトリア高原を行く：Varto地震記」	『住宅』	15	12	1966	37-41
三杉隆敏	「（カラー教室 海外旅行） イスタンブールの春」	『アサヒカメラ』	51	2	1966	194
無署名	「アナトリア平原の奇妙な村」	『サンデー毎日』	46	39	1966	3-5
長沢和俊	「イスタンブールの夜明け」	『シルク・ロード踏査記』角川書店			1967	9-24
古谷野勝三	「イスタンブール	『世界フレッシュ旅行』日本交通社		2	1967	48-55
森南海子	「旅情 イスタンブール」	『朝日ジャーナル』	9	19	1967	54-58

岡野豊	「旅情　トルコ」	『朝日ジャーナル』	9	33	1967	54-58
田中武英 ； 木村稔	「紀行　トルコの風情」	『タツタ電線技報』		1	1967	60-62
青木栄一	「イスタンブールで見た艦船」	『世界の艦船』		119	1967	24-27+90-91
広瀬徹也	「〝回想のトルコ〟（在外だより）」	『経済と外交』		520	1967	44-47
植村茂夫	『植村茂夫自伝』	植村恭夫（私家版）			1967	
柳宗玄	『カッパドキャ』	鹿島研究所出版会			1967	
柳宗玄	『太陽と洞窟の谷 ： トルコ秘境調査行』	朝日新聞社			1967	
中塚裕	「旅情〈トルコ〉男の世界」	『朝日ジャーナル』	10	3	1968	54-58
大久保忠良	「（技術紀行）トルコという国」	『土木技術資料』	10	3	1968	48-53
松本繁樹	「トルコ国内のダム見学」	『大ダム』		44	1968	60-71
渡辺良正 ； 辻佐保子	「（世界の旅）　イスタンブール：聖なる古き都」	『太陽』	6	2	1968	79-93
大島直政	『遠くて近い国トルコ』	中央公論社			1968	
近衛篤麿	『近衛篤麿日記』（全6巻）	鹿島研究所出版会			1968-9	
福田常雄	『ヨーロッパ印象旅行 ： 22カ国ひとり行く』	雪華社			1968	
別技篤彦	『アジアの旅・東から西 ： その風土・人間・歴史』	古今書院			1968	
山下正次	『流れる雲 ： ヨーロッパ紀行その他』	新詩潮社			1968	
鴨澤巌	「トルコの街で考えたこと：「地域論」の一つの考え 」	『歴史地理教育』		151	1969	46-54
長谷部信彦	「トルコ雑感」	『第三文明』		96	1969	94-101
高木敬一	「「トルコ」のぞき見(随想）」	『産業教育』	19	6	1969	21-24
藤原稔由	「（在外だより）トルコの文字改革」	『経済と外交』		564	1969	45-47
GutschowN. ； 伊藤哲夫	「イスタンブールとトルコの都市」	『ＳＤ』		62	1969	38-48
塩尻彦一	「（この土地この町）〈東西交通の十字路・イスタンブール〉」	『世界の動き』		204	1969	16-19
山県勝美	「国際経済と国際企業：ICCイスタンブール総会に出席して」	『経団連月報』	17	7	1969	54-62
広田弘雄	「国際企業に関するイスタンブール会議：国際企業と資本自由化」	『世界経済評論』	13	8	1969	46-49
広田弘雄	「国際生産とわが国の自由化：〔ICC〕イスタンブール総会を終えて」	『国際金融』		433	1969	22-25
鴨澤巌	『トルコと日本の間 ： 偏見と真実の交錯』	法政大学出版局			1969	
岡部寛之	「人間探検イスタンブールのジプシー女：<特別読物>トルコ風呂以外何でもあります」	『週刊文春』	12	9	1970	78-80＋85-86
岡部寛之	「（特別読物）人間探検イスタンブールのジプシー女：トルコ風呂以外何でもあります」	『週刊文春』	12	9	1970	78-80,85-86
大屋晋三	「トルコを訪問して〔経団連訪トルコ使節団〕」	『経団連月報』	18	5	1970	41-43
正井泰夫	「ヨーロッパへの入り口イスタンブール：トルコ都市の印象」	『地理』	15	9	1970	48-53
久保田博二	「（グラビア）イスタンブール」	『世界』		298	1970	1-10
平山郁夫	「トルコ雑感：アナトリアの遺跡群を訪ねて」	『世界』		298	1970	249-253
髙石康	「（海外通信）トルコだより」	『海外電力』	12	12	1970	31
訪トルコ経済使節団[編]	『トルコに対する開発援助の在り方 ： 訪トルコ経済使節団報告書』	経済団体連合会			1970	

大塚茂	「トルコの印象」	『包装技術』	9	1	1971	48
島田良秋	「トルコに旅して」	『発電水力』		110	1971	77-85
秋山亮二	「〈遠い国近い国〉トルコの市場にて」	『文芸春秋』	49	4	1971	203-210
無署名	「驚異！神秘！謎のトルコの"大地下都市"--3万人が住める広場、集会所、穀物貯蔵所……完備の秘密住居を探る」	『週刊ポスト』	3	45	1971	133-135
住田俊一	「トルコ・アンカラのIUOTO(官設観光機関国際同盟)総会に出席して」	『トランスポート』	21	12	1971	47-49
住田俊一	「トルコの観光事情：見聞記 」	『トランスポート』	22	1	1972	24-27
芸大探検隊	「トルコの岩窟に眠るキリスト」	『旅』	46	1	1972	グラビア
立田洋司	「短期連載　トルコ・ギリシア紀行」	『三彩』		284-288	1972	82-86,104-107,94-99,76-79,67-70&73,
辺見永治	「トルコ見たまま」	『電線時報』	25	7	1972	30-31
小松左京	「トルコ・東洋と西洋のあいだ(歴史と文明の旅-8-)」	『文芸春秋』	50	10	1972	376-388
広瀬勝裕	「トルコ再発見の旅：ある日突然 すべてを捨てて」	『日本と世界の旅』		204	1972	148-150
桐敷真次郎	「トルコのイスラム建築」	『ＳＤ』		104	1973	180-196
吉村剛太郎	『はるかなる同胞 ： 土耳古共和国見聞録』	大和書房			1973	
小松左京	『歴史と文明の旅』上・下	文藝春秋			1973	※のち文庫・全集
宮嶋圀夫	「（都市をゆく4）トルコ：イスタンブール 」	『建築』		166	1974	25-56
大村次郷	「（グラビア）アナトリアの旅」	『世界』		346	1974	201-208
橋本文男	「トルコの興亡(中東紀行：3)」	『月刊自由民主』		223	1974	144-152
河田清雄	「海泡石の産地エスキシエヒールを訪ねて：アナトリアの旅(1)」	『地質ニュース』		252	1975	30-35
成瀬輝男	「トルコ国イスタンブールの架橋工事」	『道路』		408	1975	73-77
大村次郷	「（世界の旅）トルコ=ギリシア・ローマ・ビザンチンの文化をたずねて：小アジア遺跡めぐり」	『太陽』	13	4	1975	126
三浦由己	「本場のトルコ風呂」	『統計』	26	9	1975	29-30
荻昌弘	「東と西のるつぼに立って：トルコ紀行」	『旅』	49	10	1975	180-193
桑原武夫	「トルコの印象」	『図書』		314	1975	2-13
河田清雄	「カパドキア(Cappadocia)の火山地帯を行く：アナトリアの旅(2)」	『地質ニュース』		262	1976	34-43
河田清雄	「 南西アナトリの石灰華段-パムックカーレ(Pamuk-kale)-の圧巻：アナトリアの旅(3)」	『地質ニュース』		263	1976	30-33
村上英之助	「（国際人）夢のトルコ行き」	『世界週報』	57	29	1976	32-33
鹿野[一]	「トルコの印象：鹿野先生の講演から」	『教育こうほう』	26	9	1976	24-25
立田洋司	『埋もれた秘境カッパドキア：幻の地下大都市』	講談社			1977	
河田清雄	「チグリス上流の古都ディヤルバクール(Diyarbakir)と玄武岩台地：アナトリアの旅(4)」	『地質ニュース』		269	1977	52-59
関根辰雄	「トルコの遺跡を訪ねて」	『鉄道通信』	28	1	1977	29-32
松尾金蔵	「トルコを訪問して」	『経団連月報』	25	2	1977	29-33
中野正義	「中近東見聞記：アテネ(ギリシャ)・イスタンブール(トルコ)」(1)	『九州商工時報』	47	3	1977	16-25
大村幸弘	「トルコの村から」(1)-(2)	『地理』	22	5,6	1977	150-158,124-130

小田原紀雄	「トルコ･カッパドキア地方を旅して」	『指』		313	1977	20-23
護雅夫	「トルコでトルコ史を教えた私」	『中央公論』	92	11	1977	148-158
森田勇造	『わが友〝騎馬民〟』	学習研究社			1978	
島地黙雷	『航西日録』	『島地黙雷全集』第5巻，本願寺出版			1978	※写本の初刊行
大村次郷 ； 松原正毅	「トルコ・アナトリア」	『季刊民族学』	2	1	1978	6-9
大村次郷	「アナトリアの旅：撮影日誌抄 」	『季刊民族学』	2	1	1978	10-35
大村幸弘	「トルコの村から」	『地理』	23	5	1978	70-75
大村幸弘	『埋もれた古代帝国 ： トルコ発掘日誌』	日本交通公社出版事業局			1978	
水野温子	「トルコより」	『玉藻』		567	1978	97
伊藤 義一	「トルコ経済印象記」	『租税研究』		349	1978	10-16
左藤恵	「トルコの旅」（上）・（下）	『通信協会雑誌』		811,2	1978-9	24-25,36-38
山本皓一 ； 斉藤豊	「トルコ中央高原の地下都市に人類の知恵をみた!」	『小学六年生』	31	9	1978	7-12
山本皓一 ； 斉藤豊	「（海外取材）トルコ奇岩住居のなぞ!」	『小学六年生』	31	11	1979	10-13
イスタンブール事務所･中東アフリカ課	「難問山積のトルコ経済」	『海外市場』		332	1979	20-31
大村次郷	「〈カラー〉われら地球市民 トルコ 異教の谷」	『朝日ジャーナル』	21	48	1979	54
岡部清子	『私のアンカラ日記 ： 一年間トルコ共和国に暮らして』	生活協同組合市民生協組織本部コープファミリー編集室			1980	
石田米孝	『星と三日月の国 ： トルコ紀行』	山陽女子高等学校			1980	
岡宏	「仕事を通じてみた「トルコ」：海外事情(3) 」	『工業加熱』	17	1	1980	65-69
岡田宗叡	「（山水放蕩：1-4）トルコ・ギリシアの旅」(1)-(4)	『陶説』		323,4,6,7	1980	67-72,61-66,49-55,75-77
無署名	「保存版 BIG CITY IN THE WORLD〈トルコ〉イスタンブール]」	『週刊平凡』	22	25	1980	91-102
松尾順造	「〈カラー〉われら地球市民 トルコ うごめく歴史の精たち」	『朝日ジャーナル』	22	30	1980	62
高橋忠久	「トルコの街角から(中東アラカルト)」	『季刊中東経済研究所報』		23	1980	23-26
井手俊弘	「（JETRO EYE）トルコに勤務して」	『海外市場』		349	1980	70-71
大村幸弘	「アナトリア発掘記」	『図書』		373	1980	32-37
小松久男	「アンカラ日記から」	『窓』			1980	5-13
立田洋司	『トルコの旅 ： 栄枯八千年・沈黙の軌跡』	六興出版			1981	
新川雅子	「トルコ国勢調査の思い出(中東アラカルト)」	『季刊中東経済研究所報』		26	1981	29-34
三杉隆	『私のイスタンブール』	六興出版			1981	
護雅夫	「イスタンブル」	『都市物語』上巻，朝日新聞社			1982	203-227
守屋喜久夫	『七つの大地震 ： 現地レポート』	新潮社			1982	
大村幸弘	「創造の現場 アナトリアの遺跡で」	『本』	7	6	1982	11
大村幸弘	「続・アナトリア発掘記」	『図書』		392	1982	36-41
長尾龍一	「トルコ瞥見 」	『創文』		216	1982	6-10
松永伍一	「トルコの満月」	『中央公論』	97	2	1982	47-49

松原正毅	『遊牧の世界：トルコ系遊牧民ユルックの民族誌から』上・下	中央公論社			1983	
産児角明	『東西の十字路 ： トルコ・バルカン旅のスケッチ』	三修社			1983	
福永肇	「トルコ：夢の轍(現地調査メモ)」	『季刊中東経済研究所報』			1983	22-26
桜井正昭	「トルコ･アンカラ印象記」	『かんきょう』	8	3	1983	67-73
秋山亮二	「（われら地球市民） トルコ 」	『朝日ジャーナル』	25	35	1983	54
林周二	「異国拝見(6)トルコ 」	『統計』	34	8	1983	35-37
堀田善衛	「（日々の過ぎ方：35） トルコについて」	『朝日ジャーナル』	25	37	1983	52-53
高橋忠久	「トルコの旋舞教団：始祖メヴラ-ナの生涯と追悼記念集会」	『季刊民族学』	7	4	1983	6-21
土取利行	「（TOSHIの音楽紀行）≪トルコ≫葦笛のうた」(1)-(5)	『Lartina』		355-9	1983	24-25,24-25,22-23,16-17,20-21
松原正毅	「（海外紹介） 遊牧民の収入と消費：トルコ系遊牧民ユルックの場合」	『月刊国民生活』	13	10	1983	36-37
長谷川泰資	「トルコ共和国･アルティンカヤ水力発電所の設計と施工」	『電力土木』		187	1983	82-94
岡林洋 ； 長谷川泰資	「トルコ共和国アルティンカヤ水力発電所工事の現況」	『建設の機械化』		405	1983	10-16
設楽國廣	「トルコの国内旅行」	『季刊東西交渉』	2	4	1983	12
加藤碩一	「北アナトリア地震紀行」	『地質ニュース』		342	1983	13-29
加藤碩一	「エルズルム(トルコ)雑感」	『地質ニュース』		356	1984	25-27
遠山一行	「（東京日記：第4-5回)トルコ紀行」(1)-(2)	『現代思想』	12	9-10	1984	26-29,34-38
鎌沢久也	「（地球劇場） トルコ･イスタンブール」	『Asahi journal』	26	51	1984	55
丹生谷章	『トルコ バスの旅 ： 風物と遺跡を訪ねて』	二宮書店			1984	
赤松順太	『新トルコ風土記 ： 大地の調べ歴史の宴』	東洋経済新報社			1984	
臼井斌男	『トルコ遺跡の旅』	三修社			1984	
岡部清子	『トルコ、遥かな国：私のアンカラ日記』	旺文社			1985	
高橋克男	「トルコ訪問記」	『ＯＣＡＪＩ』	9	5	1985	16-17
無署名	「これぞホントウの｢トルコ風呂｣」	『プレジデント』	23	2	1985	30-31
鎌澤久也	「僕らは街頭販売員：トルコで出会った子どもたち」	『母の友』		382	1985	39-43
小池宣次	「やさしいトルコの人々」	『自動車工業』	19	3	1985	30-32
石山雅史	「（海外ネットワーク） 東西文明の合流点へ：トルコの旅」	『新建築』	60	3	1985	127-128
佐瀬正敬	「（トピックス）トルコ貿易振興シンポジウムに参加して」	『中東協力センターニュース』	9	12	1985	7-8
無署名	「訪トルコ経済節団帰国 」	『中東協力センターニュース』	10	1	1985	8-12
高倉巌	「（リレーエッセエ）トルコの在留邦人医療に携わって研究者からのエアメール」(1)	『望星』	16	5,7	1985	96-100,102-106
大堀弘	「トルコを訪問して」	『経団連月報』	33	5	1985	71-73
三浦新	「（随筆）トルコとユーゴスラビアの旅」	『標準化と品質管理』	38	8	1985	102-103
無署名	「トルコの地底に…大魔宮を見た!! 」	『小学六年生』	38	5	1985	16-18
仲原利男	「トルコへの旅」	『国民』		1031	1985	54-60
香取栄一	「ヨーロッパ側のシルクロード：トルコ遺跡を訪ねて」（上） （下）	『Keisatsu jiho』	40,41	12,1	1985-6	128-131, 122-128

前田高昭	「トルコ見聞記」	『TRIアングル』		55	1985	29-35
通商産業省 通商政策局 中東室 ； 産業政策局 国際企業課	「トルコ投資環境調査団報告」	『中東協力センターニュース』	10	9	1985	13-16
小滝光郎	「いま魅力に飛ぶトルコ紀行」	『潮』		320	1985	250-260
沢木耕太郎	『深夜特急』（全3巻）※第3巻は1992年刊行	新潮社			1986	
加藤碩一	「北アナトリア地震紀行(続)」	『地質ニュース』		387	1986	38-53
山田剛之	「（MEDICAL・ESSAYS）トルコの旅」	『日本医事新報』		3234	1986	68-70
菊池浩一郎 ； 田代襄二 ； 北村邦雄	「トルコ･共和国アルティンカヤ水力発電所工事の現況」	『電力土木』		202	1986	103-110
片寄弘之 ； 古屋一	「（報告）中東･アフリカ包装の旅：エジプト,トルコ,モロッコ,ナイジェリア･ケニアからの報告」	『包装技術』	24	6	1986	42-52,554-564
小野沢弘史	「トルコを訪問して」	『柔道』	57	7	1986	74-75
滝原章宏	「（MEDICAL・ESSAYS） トルコのトルコ風呂」	『日本医事新報』		3251	1986	65-67
川治熙幸	「宗之若宗匠夫妻のトルコご訪問」(1)-(2)	『淡交』	40	8,9	1986	写真+176-8,174-6
三村庸平	「トルコを訪れて：「トルコ･日本週間」印象記」	『経団連月報』	34	8	1986	59-61
斉藤郁哉	「トルコ・ギリシャから東欧への旅の記録」(1)-(2)	『郵便貯金』	36	8,9	1986	30-33,24-29
斎藤邦樹	「醗酵乳の原点を訪ねて：コーカサスとトルコ」	『食の科学』		108	1987	50-56
富岡良信	「トルコのたばこ産地とお国柄：トルコ駐在員のある一日」	『葉たばこ研究』		103	1987	61-67
飯島衛	「トルコ紀行」上・下	『みすず』	29	3,4	1987	16-27,21-29
塚本晃	「（記者の眼）トルコ“奇”紀行」	『通産ジャーナル』	20	7	1987	28-29
田中俊子 ； 福田保	「トルコ服飾文化学術調査旅行報告」	『国際服飾学会誌』		4	1987	180
芝木好子	「新潮 トルコの旅」	『新潮』	84	8	1987	182-183
中川這夫	「湖上に浮かぶ教会堂〈トルコ〉」	『中央公論』	102	11	1987	9-10
島田雅彦	「（特別紀行）トルコ4000kmを走る」前・後	『旅』	61	10,11	1987	173-180,173-180
重兼芳子	「トルコ旅行で学んだこと」	『潮』		342	1987	67-69
無署名	「アジア西端の知られざる〔食文化〕：トルコで米ライスを見つけた！」	『週刊宝石』	7	41	1987	19-26
山下宣博	「第23回海外道路調査団報告：エジプト,トルコ,イギリス,西ドイツ,フランス」	『道路』		562	1987	77-84
谷山惠一	「（海外だより）トルコ第2ボスポラス橋の建設現場から」	『コンクリート工学』	25	12	1987	44-48
荒牧勇	「トルコ柔道指導記」	『柔道』	58	12	1987	76-77
新井哲治	「男闘呼組､幻想のトルコ旅情グラフ」	『週刊明星』	30	48	1987	206
松原正毅	『トルコの人びと』	日本放送出版協会			1988	
茶谷紀元	「（土と芽）トルコで出会った人々：我が家の異文化体験」	『兵庫教育』	39	10	1988	54-55
近藤純夫	「（特別記事）トルコの大自然を行く」	『山と渓谷』		632	1988	124-127
仲衛	「国際化とカラオケ文化：トルコ、エジプトへの旅から」	『世界の労働』		38	1988	20-23
井上加代子	「トルコに旅して」(1)-(8)	『日本病院会雑誌』	35	3-7,9,11	1988	100-106,97-107,58-63,81-91,72-78,100-108,89-94,78-88

深沢淳志	「トルコ生活あれこれ：かいがいつうしん」	『道路』		566	1988	107-109
北村邦雄	「トルコ共和国アルティンカヤ水力発電所運開する」	『電力土木』		214	1988	124-135
谷屋友子	「（女の仕事）：〈トルコ絨毯コーディネーター〉」	『週刊文春』	30	21	1988	69
馬場一雄	「トルコの旅から」	『小児看護』	11	6	1988	734-737
二階俊博	「トルコ使節団報告記：″空飛ぶシルクロード″を行く」	『鋼橋塗装』	16	3	1988	35-38
大形進	「（報告）トルコにおける第3回国際包装シンポジウムに参加して」	『包装技術』	26	9	1988	144-148
吉田信二	「トルコの第2ボスポラス橋開通式典」	『道路』		572	1988	86-89
武田光夫	「第2ボスポラス橋の施工報告」	『道路』		572	1988	90-95
中塚裕	「（グラビア）エフェソスの遺跡（トルコ）」	『中央公論』	103	10	1988	9
菜村すみえ	「（随筆）晩秋のトルコ周遊」	『日通文学』	42	11	1988	17-22
黒田定明	「トルコ国鉄アリフィェ～シンジャン間新線建設予備調査」	『ＪＡＲＴＳ』		116	1988	1-11
山口宗助	「トルコ旅行記」	『香料』		160	1988	37-44

【平成以降に刊行された明治～昭和期のもの】

中村新七	『波乱万丈』	中村政子（私家版）			1997	
池辺三山	「欧羅巴漫遊日記」	『文学者の日記(2) 池辺三山2』博文館新社			2002	
芦田均（著）；福永文夫；下河辺元春（編）	『芦田均日記一九〇五-一九四五』（全５巻）	柏書房			2012	
大井昌靖	『初の国産軍艦「清輝」のヨーロッパ航海』	芙蓉書房出版			2019	

Abstract

Bibliographies of the Japanese Turkology Works (3):
Works about Travel and Residence Journals in the Ottoman Empire and Turkish Republic

MISAWA Nobuo

It is conceded that past and present travel and residence journals about foreign countries contains the quite important information for researches of humanities such as history, sociology and anthropology. These journals take a wide variety of forms; published books (including limited editions and private editions), articles and essays in the magazines and newspapers, unpublished reports and documents, unpublished manuscripts and so on.

I present the Japanese travel and residence journals about the Ottoman Empire and Turkish Republic in the published books and articles and essays in the magazines from MEIJI Era to the end of SHOWA Era (1868-1988). Of course, the newspapers had very important journals such as written by Shotaro NODA, who was the first Japanese resident in Istanbul (1891-1893) and the unpublished reports written by the Japanese Lieutenant Colonel Yasumasa FUKUSHIMA. In future it requires to construct the complete data base of all forms the Japanese travel and residence journals about the Ottoman Empire and Turkish Republic in all forms as above mentioned. My small attempts up to this time about bibliographies of the Japanese Turkology works are the only first step for the future data base on WEB site.

It is possible to divine the journals in five periods; (A) End of Tokugawa Shogunate. (B) MEIJI Era(1868-1911), (C) TAISHO Era(1911-1925), (D) SHOWA Era (prewar&war period, 1926-1945), (E) Showa Era (post warperiod, 1945-1988) . The journals since HEISEI period to the present (1988-2021) are excluded due to some practical matters. The development of technology changed the form of documents. The digital photos and videos on SNS or Instagram changed the travel and residence journals. We must consider these new documents when we tried to construct the data base.

Key words: Turk, Turkey, Ottoman Empire, Turkology